

新型コロナ対策の 最前線で帰国研修員が活躍



野口記念医学研究所でPCR検査を行うアバナさん。

ガーナでは新型コロナウイルスの感染者数9,910人、死亡者数48人（6月9日現在）と増加傾向が続いている。同国でPCR検査の約8割を担っているのが、1979年に設立された野口記念医学研究所だ。昨年3月には同研究所内に日本の支援で「先端感染症研究センター」が完成し、最新設備が整えられた。

同研究所の主任調査員助手のクリストファー・ザイブイエン・アバナさんは、昨年JICA東京で実施された「HIVを含む各種感染症コントロールのための検査技術とサーベイランス強化研修」に参加。

PCR検査によるウイルスの特定分析などを学んだことが、現在の新型コロナ対策にも生かされている。アバナさんは、研修で学んだ日本式の「5S（整理・整頓・清掃・清潔・しつけ）」「カイゼン（改善）」が検査業務の効率化に役立っていると言っている。毎日数千件の検査をするなか、「検体受け取りから検査までの流れを効率的にするために5Sやカイゼンなど研修で学んだことを現場で生かし、これからも業務を進めていきます」と力強く話している。

* ガーナヘルスサービス <https://ghanhealthservice.org/covid19/>

ニュース深掘り！ 研修員と直接触れ合う“日本の中の現場”

研修事業は海外の人と直接関わるため、日本の中の現場、とも言われます。JICAのビジョンは、信頼で世界をつなぐ。ですが、研修員の学ぶ熱意を肌で感じて一緒に研修をつくり上げることは、まさにそれを実践する仕事だと感じています。現在、新型コロナの影響で研修員の受け入れは見合わせになり、状況を見ながら再開していく予定です。今は寂しいですが、早く研修員たちと会えることを願っています。

JICA東京の役割のひとつが、知識共創プログラムの実施です。これは、途上国の人材に日本の知見と技術を伝えてパートナーとしてともに学びあい、新たな価値を創造する研修です。感染症関連では、対象とする途上国もアフリカ、アジア等を問わず、年間五つほどの課題別プログラムが行われています。

研修では、一方的に「教える」のではなく、研修員同士で議論をしたり、講師や関係者と交えて課題の解決策を考え抜いて、一緒によりよい学びの場を、共創する試みを行っています。また、専門的な知識や技術を学びあうだけでなく、帰国後にリーダーとなつて周りを引っ張っていく人材になるための知識や経験を伝えることも重視しています。「5S」や「カイゼン」もそのひとつで、より途上国のニーズを研修に反映させようとしています。

JICA東京
人間開発・計画調整課
橋本裕保さん
はしもと・ゆうほ

新卒で教育系企業に勤めた後、青年海外協力隊としてマラウイでコミュニティ開発に携わる。帰国後は大学院、教育系企業を経て、2019年11月にJICA入構。JICA東京で短期研修の運営を担当している。



JICA HEADLINE NEWS

6月12日 | ▶ 東ティモールの国づくりを支えて20年：未来を担う人材を育成

国立大学での教員育成など、人材育成分野への支援の歩みをふり返る。

6月2日 | ▶ カンボジア 給水態勢の強化に無償資金協力

「タクマウ水道拡張計画」がスタート。人口増加に伴う都市部の水需要の増加に応える。

5月25日 | ▶ ネパール データ整備で自然災害に備える

洪水の被害が深刻な南部平野地で「数値標高モデル」等の整備を目指す無償資金協力を実施。



◀◀ JICAのニュース&トピックスをもっと読みたい方はアクセス!
<https://www.jica.go.jp/information/index.html>